

OIC（イスラーム協力機構）におけるイスラーム連帯

—OIC 加盟国マレーシアに着目して—

平成 26 年入学

派遣先国：マレーシア

池端 路子

キーワード：マレーシア、OIC（イスラーム協力機構）、ウンマ、イスラーム復興

対象とする問題の概要

OIC（イスラーム協力機構）は、イスラームを旗印に設立された国際機構であり、経済協力や紛争の調停、国際会議の開催など、様々な役割を担っている。国内にムスリムが少数でもいれば加盟することができ、2015 年現在 56 か国 1 地域が加盟している。OIC は 1969 年にモロッコのラバトにおける第一回イスラーム首脳会議で設立が決議され、翌 1970 年にジェッダで行われた外相会議において会合の定期化と常設事務局の設立を決定、1971 年に事務局が開かれて正式な国際機構となった。その初代事務局長がマレーシアの初代首相アブドゥル・ラーマンであったことから、OIC におけるマレーシアの果たす役割・影響力が一定程度存在していることがわかる。OIC 加盟国は中東諸国だけではない。マレーシアのような東南アジア諸国も、重要な加盟国である。よって、OIC 研究においては様々な地域を視野に入れつつ研究を進める必要性がある。

研究目的

本研究の目的は、OIC をイスラーム復興運動の流れに位置づけてその存在意義を再定義することである。OIC に関する先行研究・文献は限られており、わずかにある先行研究も、多くがその経済協力の側面に着目したものである。また、これまで OIC のイスラーム世界における政治的影響力、紛争解決能力は低いと見なされてきた。しかし、本機構はイスラーム世界のコンセンサス形成には少なからず寄与しており、目に見える紛争解決の実績の少なさからだけでその能力を低いと評価してしまうのは問題である。1960 年代以降高まりを見せたイスラーム復興運動は、イスラーム世界全体のコンセンサスを形成することを目標とし、OIC はその目的に沿って設立されたと考えられる。よって、半世紀に及ぶイスラーム復興運動の歴史の流れにおいて、OIC の役割やそのコンセンサス形成への寄与度を考えた研究を行うことが本研究の目的である。イスラームのウンマ（共同体）の形成という視点においても、OIC の存在は非常に興味深いものである。これまでの OIC 研究は中東諸国に着目するものが多いが、初代 OIC 事務局長を輩出したマレーシアの寄与度などを考慮に入れると、東南アジア諸国の考察も欠かせない。そこで、本研究ではマレーシアの OIC における役割に焦点を合わせ、フィールドワークを行った。

フィールドワークから得られた知見について

フィールドワークでは、文献調査を中心的に行った。初代マレーシア首相であり初代 OIC 事務局長のアブドゥル・ラーマンに関する文献や、OIC におけるマレーシアの経済的役割、ハラール商業に関する寄与などに関する文献が散見され、自らの OIC 研究を下支えするような先行研究を見つけることができた。



↑行政新首都プトラジャヤにあるプトラ・モスク。
市名のプトラジャヤは初代首相アブドゥル・ラーマンの名前の一部（Putra）にちなむ。



↑駅での風景。前方にはマレー人女性、後方には中国系マレーシア人女性の姿もある。

また、マレーシア国民大学において開催された国際シンポジウムに参加し、マレーシアにおけるイスラーム研究者との交流を行い、確かな研究者ネットワークを築くことができた。今後自らがイスラーム研究を進めていくにあたり、重要な人脈を得ることができたと感じている。



↑マレーシア料理ナシ・ルマ。右手を使い、手で食べるのがマレー式。



↑マレーシア国民大学にてシンポジウムに参加。
研究者ネットワークを広げた。

また、マレーシアという国のあり方を肌で感じられたことが大きな成果の一つであった。マレーシアはイスラーム国家であるが、ムスリムのマレー系国民の他に中華系、インド系の国民も共存している。顔まで覆った敬虔なムスリマや、タンクトップにショートパンツの中華系女性、ヒンドゥー神の偶像を車に飾ったタクシー運転手などが共に暮らしており、モスクも教会もヒンドゥー寺院も仏教寺院も立ち並ぶ。様々な民族・文化・宗教のそれぞれがたくましく自己主張しながらも共存している世界に身を置くことは、非常に刺激的な経験であった。このようなイスラーム国家のあり方に触れるのは自身にとって初めての経験であり、イスラームが中東だけのものではないと強く実感した。これまで知識として東南アジアのイスラームを知っていても、湿度の高い熱帯の空気に触れながら人々と接する体験は、そうした頭の中だけの知識を塗り替えるものであった。



↑ココナッツジュース屋さん。熱帯気候のマレーシアで、疲れを癒してくれる飲み物の一つ。



↑クアラルンプール中心部のショッピングモール。日系企業も多く進出し、経済発展の一端が見られる。

今後の展開・反省点

今回のフィールドワークは短期間であったこともあり、文献調査と研究者ネットワークを構築することに集中した。このフィールドワークのおかげで、今後は得られた文献を精査し研究に生かすことができるほか、今回築いた研究者ネットワークを利用することで OIC に関する聞き取り調査へとつなげることが可能となるだろう。また、今回東南アジアにおけるイスラーム国家を自らの目で見たことは、自身のイスラームに対する視野を大きく広げ、イスラームに対する理解を深めることに寄与したと感じているが、次回マレーシアにおいてフィールドワークを行う際には、より具体的な聞き取り調査やデータ収集などを行いながら研究を進めていきたい。